

PICK UP!!

TVCM・新聞・雑誌・Webで認知度アップ!!

TV



「愛車のツヤを長持ちさせたいなら、キーパーコーティングに任せるべきだ」



「ドイツと日本の技術が支える信頼のカーコーティング」



「新車コーティングからメンテナンスまで、プロが責任を持ってサポートします」



「かつてない守りのカとツヤをあなたの愛車に」



「キーパーコーティングで愛車を守れ」



「愛車を長持ちさせる、キーパーコーティング」

4月7日からTV東京系ネット「ガイアの夜明け」番組提供としてキーパーコーティングのCMが流れ始めました。毎週火曜日午後10時から放送されています。毎週火曜日のCM放映後にはWebサイトのアクセスが劇的に増えました。サーバーの容量が足りなくなり、サーバーのスペックを改善したほどです。番組のイメージも非常に良いので、良い商品、信頼感ある商品として伝わっていると思います。TVCMの効果はとても良いと感じています。

また、キーパーのWebサイトにもオリバー・カーンを起用しました。オリバー・カーンの存在感と信頼感がWebサイトにも反映されています。キーパープロショップから施工した車を披露してもらう「お客様フォトログ」も好評で、日に50件を超える施工車がお披露目されます。Webサイトは更新されるほどに視聴者数が増え、飛躍的に役に立つ



存在へと成長しています。

またカービュー(株)(ソフトバンク子会社)の運営する「みんなから」からの導入も増えてきており、カーコーティングのWebサイトとして存在を固めています。増えているアクセス数が、施工店様へと繋がるようにこれからも改善に努めていきます。

4月19日(日)には日本経済新聞の朝刊に全国版の広告を掲載するなど、TVやWebでの商品認知だけではなく、新聞や雑誌でも積極的にPRしていきます。雑誌には化

学的な知識を掲載して商品の良さを説明します。イメージだけでなく、理論的にコーティングが必要であり、キーパーコーティングが良いと納得していただくようにしていきます。現在ベストカー、LEVOLANT(ルボラン)に掲載が決まっています。今後も、TV以外のメディアでも様々な活動を行っていきます。

新聞



雑誌

5月1日(金)、快洗隊「中川店」オープン!



「快洗隊 中川店」  
住所:愛知県名古屋市  
中川区高杉町83-1  
電話番号:052-354-3900

GW真っ只中の5月1日、快洗隊18番目の直営店として、名古屋市中央区に快洗隊「中川店」がオープンしました。中川店は県内一番の幹線道路である国道1号線に面しており、間口39メートル、272坪の長方形で、交通量・立地条件共に絶好の店舗です。

今回は新しい試みとして、「セルフ洗車場」を併設、店舗のちょうど半分をセルフ洗車場に充てました。

快洗隊にセルフ洗車場を併設することで、色々なメリットが出ています。

- ①272坪の広い敷地内を常に車が行き来することで、リピート客が無いオープン当初でも繁盛感を出せる
- ②「洗車(コーティング)専門店は、なんとなく敷居が高い」というイメージを払拭できる
- ③コーティングはプロに任せ、普段

の洗車は自分でしたいという二つのユーザーニーズを両方取り込むことが出来る

④洗車・コーティングに関する疑問や不安を持っているセルフ利用客が、気軽にプロのアドバイスを受けることが出来る

ここに掲げた以外にも、今までは未知であったセルフ洗車ユーザーの情報もオンタイムで収集出来るなど、色々な可能性を秘めた店舗です。

設備面では、中川店のセルフ洗車場用に開発したオリジナルノンブラシ洗車機を設置。セルフ洗車では初となるノンブラシ+純水仕上げのメニューで、拭き上げをしなくても水シミの心配がないという、セルフでありながらも上質な洗車を提供します。

また趣向を凝らしたゲストルームは、快洗隊・セルフ洗車、どちらをご利用

用のお客様でも入りやすい配置にし、コーティングショップとセルフ洗車の融合を図ります。

「快洗隊でコーティングをして、普段の洗車は自分でしている」というユーザーが多く存在していることは分かっていましたが、そんなユーザーが普段の洗車をどのようにしているのか、セルフ洗車場の顧客と異質の快洗隊顧客層が同じ空間に同居することで、どのような状況が起きるか全くの未知数です。今後この紙面で最新の動向をお届けします。



Column  
オリバー・カーンの時代

その3



熱さと冷静さと分析能力を兼ね備えた男。

オリバー・カーンは、サッカーの歴史でも最高のゴールキーパーの一人であるばかりでなく、ドイツサッカー界有数のインテリとしても知られている。大学で経済学を専攻していた彼は、株式投資の専門家としても名が知られていて、ドイツでは投資番組のコメントーターとしてテレビ出演をするほどだ。

熱さと冷静さと分析能力を兼ね備えている男なのである。熱さとナイーブさは、日本で開催されたワールドカップのエピソードでも知ることができたことは、過去2回の話でお分かりいただけたのではないだろうか。

しかし、彼の熱さを物語るエピソードはそればかりではない。私がオリバー・カーンを好きになったエピソードにこんなものがある。

オリバー・カーンは、ブンデスリーガ(ドイツのサッカー1部リーグ)では名門ク

ラブであるFCバイエルン・ミュンヘンに所属し、主将として数々のタイトルを勝ち取ってきた。チームとしても選手としても、一流であることは折り紙つきである。だが…

2001年のリーグ戦でのごとく、カーンのバイエルン・ミュンヘンが1点差で負けているところで、ミュンヘンにコーナーキックが与えられた。チャンスである。なんとしても得点して同点に持ち込みたい。

コーナーキックを蹴るのは巧者エッフェンブルク。当然観客の期待は高まる。なにしろ、バイエルン・ミュンヘンには、その期待に応えるだけの力があるフォワードの選手たちがいるのだ。

と、そのときのこと。するとオリバー・カーンが、コーナーキックが飛んでくるであろう敵ゴール前に走ってきたのだ。ということは、カーンが守るべ

きミュンヘンのゴールは空っぽである。シュートをするチャンスが一人でも多くありたい、と思つての行為だろう。あるいは、なかなか点が取れない攻撃の選手たちへの憤懣があったのかも知れない。

そのカーンを、エッフェンブルクは見たかどうか知らぬが、エッフェンブルクが蹴ったコーナーキックは良いコースを飛んでゴール前の敵味方入り乱れての密集に落ちた…、はずだった。

しかし、ボールは相手ゴールに突き刺さっている。沸きあがる歓声。

よく見れば、ゴールにボールを突き刺したシュートは、選手のキックやヘディングによるものではなく、もちろん相手の自殺点でもなく、それは、オリバー・カーンの右手によるものだったのである。

いくら手を使うことが許されているゴールキーパーとはいえ、それは自分のゴール

前のペナルティエリア内だけのこと、そこを一步でも出たら他の選手と同様に手を使えばハンドというファウル、故意に使えばレッドカードで退場しなければならないほどだ。

カーンは、素晴らしいシュートの変わりに、一発退場であるレッドカードを頂戴し、ついでに、素晴らしいコーナーキックを蹴った同僚のエッフェンブルクからは、「味方選手の退場で笑ったことは初めてだ」という賞賛(?)まで手に入れたのである。世界中のファンからの、カーンじゃ仕方ないよなあ、という最大の愛情表現と共に。

冷静な熱血漢オリバー・カーンのカーンらしさは、こんな失態をも彼の魅力に変えてしまう。偉大な選手というのはそういうものなのだ。

(この連載は弊社内のサッカーファン投稿です)